

パーソナリティ研究序説

— 曾国藩の事例を通して —

清水 稔

【抄 録】

小論は、歴史上の人物のパーソナリティを分析し、その人物の歴史上における行動原理を解明することにある。心情が吐露されやすい日記や書簡、とくに家族に宛てた手紙をもとに、人間の行動を駆り立てる欲求の解析に迫る。ここではパーソナリティ研究の序説としてまず中国近代史上における曾国藩を取り上げ、彼のパーソナリティ形成の要因となった故郷や家族に対する彼の考え方に着目し、その結果として彼が現在あるのは祖先の積徳善行の賜物、治家が生活・人生の基本と考え、自給自足的な農村的気風を維持し、勤と儉によって慎ましく暮らす寒士の家とするのを理想としたことについて、『家訓』『家書』などを通して明らかにした。

キーワード パーソナリティ、環境的要因、曾国藩、寒士の気風、農耕と読書

(1)

かつて恩師波多野善大氏の遺稿集⁽¹⁾の編纂に携わった時から、波多野氏が晩年追究してやまなかった歴史上の人物のパーソナリティ研究——歴史上の人物の行動を動機づけた欲求とは何か、その人物の歴史的行為の奥底にある意欲や情念とは何か、そういう欲求をもつようになったその人物のパーソナリティとは何か——について強い関心をもつにいたった。もちろん人間を行動に駆り立てるものに、崇高な理想や理念・目的に裏付けられたものもあるだろう。しかしそれとても、何らかの形でその裏側に、その人間の欲求が必ず渦巻いているものである。したがって彼らの歴史的行為の底にある心理的動因・意欲を問うて、はじめて歴史研究が生き生きとし、人間としての歴史が描けるのではあるまいか。

歴史的人物のパーソナリティはきわめて文学的なテーマであり、文学作品のなかで多くは描かれるものであるが、それを歴史的なテーマとして取り上げてみたい。しかし歴史学が史料の学問であることを考えると、史料にかなり制約されることになる。人間の欲求、心理的動因、パーソナリティなどを読み取ることができる史料といえば、その人物の本音が自由に語られた

ものでなければならないし、またその行間から本音が自由に読み取れるものでなければならない。その意味で、日記とか書簡などがあれば好都合であるが、それらの多くは他人に読まれることを想定して書かれたものであることに留意する必要がある。それを留保しつつ歴史上の人物のパーソナリティを分析し、その人物の歴史上における行動原理を解明したい。

小論では、研究の蓄積も多い曾国藩⁽²⁾のパーソナリティを取り上げて、彼の歴史的な行為の奥底にある人間的あり方を探ってみたい。なお波多野氏の教示にかかる、精神分析の創始者フロイトが分析した傑作『ウッドロー・ウィルソン — 心理学的研究⁽³⁾』や、精神分析法を応用して描き出した政治学者ルシアン・W・パイの『指導者としての毛沢東⁽⁴⁾』は、小論のパーソナリティを考えるうえで大きな示唆を与えてくれた。

(2)

曾国藩のパーソナリティを考えるにあたり、まずパーソナリティとは何か、それについて私が理解している一般的な解説・定義からはじめたい。とはいっても心理学や精神分析の理論について全く初歩的な知識しかないものが語る話であり、誤認を含む戯言と思っただきたい。しかしこの分析・研究を学ぶことによって歴史的研究の新たな一視座が提供できればと考える⁽⁵⁾。

人は家庭・学校・仲間・職場などの社会生活の場面で他の人と何らかのかかわりをもって、さまざまな行動をしている。しかしその行動は生活の場面ごとになんとか関係のないバラバラなものかといえば、そうではない。どちらかといえば、相手が誰であっても、どんな状況にあっても、人それぞれに固有の一貫した行動傾向を示すということができよう。そのように一人一人に固有の行動傾向に帯びる特徴、つまり人間のもっている性格の総体をパーソナリティと表現できる。

人の特性や行動傾向を表す同義語はいろいろある。個性ともいうし、人格ともいう。また性格、気質、素質などもそれにあたる。心理学ではそれぞれに固有の概念規定をもっている。たとえば個性とは、一人一人の人間を他の人間から区別する個々の特徴を示すものとして用いられるし、性格とは、個性のなかの、人間の行動様式（考え方、感じ方、行為の仕方）に関係ある、抽象的な考え方、敏感さ、社会的などの性格特性が集まってできた全体構造を指している。気質とは、性格の基礎となる遺伝的・生物学的な感情特性であり、また素質とは、個性および性格を、ある目標に向かう傾向という観点から考えたときに使用される（たとえば音楽という目標をおいて、これに対する能力があるときに音楽的素質があるという）。人格とは、行動の総称として用いられるが、具体的には認知的な特質、感情的な特質、意志的な特質など精神的特質のすべてを含んでいる。

小論ではこれらの概念についての厳密な使い分けをしているわけではない。諸個人のパーソナリティが、時には人格として、時には気質として、時には個性として表記される。パーソナリティは個性・人格・性格・気質・素質などの総体として理解されているとあってよい。

パーソナリティは、それが形成される過程と深くむすびついているものである。形成過程に作用するものとして、生物学的要因、環境要因、文化的要因などをあげることができよう。

生物学的要因としては内分泌腺や体格・容姿など形態的なものが考えられる。内分泌腺（甲状腺・脳下垂体・副腎・生殖腺・胸腺など）からはさまざまなホルモンが分泌され、それらは個体の成長・成熟・発達と深くかかわるだけでなく、個体内の情動的側面とも関係する。たとえば甲状腺機能が亢進すると、精神的には刺激性過敏、興奮、気分不安定、不安焦燥、人格の先鋭化などをもたらす。小論でも曾国藩の病気や健康法に着目する背景はここにある。つぎに体格や容姿などの身体的特徴は、直接的には個人のパーソナリティに影響を与えるものではないが、周囲の人たちがいかにその人を評価するか、あるいはどのような態度・行動をとるかによって、その人のパーソナリティの形成に影響を与える。小論で指摘する曾国藩の身体的特徴もこの範疇に属するのである。

環境要因としては、とくに家庭環境を無視することはできない。家庭環境でもとくにパーソナリティ形成にもっとも深くかかわっているのが母子関係であり、親の養育態度である。さらに兄弟姉妹の多寡や出生順位、愛情の濃淡などの家族関係、親の人格・教養、人生観などの個人的要因、親の職業・収入などの社会経済的地位、自身の友人関係、居住地域などもパーソナリティ形成に影響を与える。この部分にこそ小論のパーソナリティ論の核心があるといえる。もちろんそれは関係史料が比較的豊富にあることにも由来するのであるが。

パーソナリティは一人一人固有のものであるが、同じ文化を共有する人々の間には共通するパーソナリティがある。同じ文化圏では、単に伝統的な儀礼作法や習慣行動という目に見える文化だけでなく、それらの背後にある風土や歴史に根ざした価値観や思想体系という目に見えない文化も共有されている。このような文化の影響もパーソナリティ形成に大きな役割を果たしている。それは小論の曾国藩のパーソナリティ論のなかでも言及しているように、人間は伝統的な環境（小論でいえば儒教的な倫理体制といいかえてもよい）のなかで人間的に形成されるものであり、伝統的な人間的あり方から抜け出すことはむづかしいのである。

(3)

曾国藩の評価は、多くは太平天国および洋務運動の評価、たとえば前者を革命、後者を反革命とする評価と密接に連動して行われてきたが、彼が文学・思想・哲学等の領域で論じられる場合は、その歴史的评价は後景に押しやられ、文人・学者として一定の評価が与えられ、こと歴史・政治・経済等の分野のなかで論じられると、一転して厳しい評価が下されてきた。その最たるものが、范文瀾の「漢奸膽子手(売国奴・死刑執行人)曾国藩⁽⁶⁾」という評価であり、その後の中国における歴史学会での定説とされてきた。しかし近年の曾国藩研究は、文化大革命を契機として、革命という観点からのみ一方的・教条的に評価するのではなく、洋務運動の近代的側面を評価する動きと連動させ歴史の現実を直視する「实事求是」のなかで曾国藩の人間

像を見直してみようとする方向へ変わりつつある⁽⁷⁾。そこで曾国藩の評価に関する歴史的な変遷を簡単に概観しておきたい。

曾国藩在世（1811－1872年）の時、とくに太平天国鎮定以後は、中興第一の名臣と称され、死後も清朝政府や彼の後継や弟子たちによって忠節・愛国・清廉の名臣・名将・名相として称讃された。一方では民乱の徹底した弾圧者として民の側からは「曾剃頭（首切り人）」「曾屠夫（屠殺人）」と揶揄されていた⁽⁸⁾。変法派の曾国藩評価は、譚嗣同が『仁学』（『清議報』2－14、1898年）のなかで中興の諸公は重罪に処せられるべきもの、中国崩壊の危機を招いた元凶と糾弾したことをのぞけば、必ずしも厳しい批判はなされていない。むしろ日清戦争の敗北（このことは当時の知識人には亡国の危機と受け止められていた）の当事者であった李鴻章への批判が痛烈であった。革命派の曾評価は、太平天国の後継をもって任じる孫文に代表されるように総じて厳しい。とくに「排満興漢」の民族運動としての革命運動の立場から、曾国藩批判は満州族の清朝を助けて漢族の太平天国を弾圧した一点に集中している。そのなかにあつて上海で刊行された『黄帝魂』（1903年）では曾国藩らを「今日の死漢奸」と指弾しているのに対して、湖南の革命家楊毓麟は『新湖南』（1903年）のなかで、湖南人として曾国藩・湘軍が天下に大罪を負った点を反省すべきだとしながらも、むしろ彼らが鎮圧の余勢をかって満州族を遼河の外に追放しなかったことが問題にされねばならないと論じているように、必ずしも否定的な評価にはなっていない。1940年前後から国共の対立が激化していくなかで、曾国藩の評価は、明確に二分された。一つは国民党の領袖となった蒋介石に代表されるもので、救国復興の英雄、伝統文化の再興者、西洋文化と伝統文化の新融合者として曾国藩を称揚する評価、一つは共産党に代表される、前述の「漢奸膽子手」という曾国藩評価である。今日の曾国藩評価も、日本での曾国藩研究を含めてこの延長線上に位置しているといえよう。小論では、このような歴史的な評価をもふまえつつ、しかしその評価に固執することなく、人間としての曾国藩像をえぐりだすことに力点を置きたい。

つぎに曾国藩のパーソナリティを描くための史料についてであるが、基本的にはさまざまな事柄、いろいろな人物に対して曾国藩の心のうちが、たてまえではなく本音で、偽善・粉飾ではなく自由に奔放に書かれている史料であれば、彼の人間像を浮かび上がらせるのに一番都合がよい。その意味で日記、書簡は好材料である。

曾国藩には自らの手書きによる膨大な日記が残されている。『曾文正公手書日記』〈上海中国図書公司、宣統元（1909）年刊〉台湾学生書局、1956年影印本）がそれである。当時の日記の一般的なあり方から、他人が読むことを想定されたものであり、なかには仲間で回し読みした時期のものもあるが、この手書き日記には、後世の人による削除・補筆・改定がないことを確認できるものである。日記は、道光十九（1839）年正月（曾国藩29歳の時）に始まり、同治十一（1872）年二月初三日（旧暦、以下同様）、62歳で亡くなる前日まで、一日も休むことなく書かれたらしい。ただ道光二十五（1845）年三月から咸豊八（1856）年二月と五月までの部分

が失われていて現存しない。小論では、上記の手書き日記と対照しながら、1987年岳麓書社刊行による『曾国藩全集』日記1-3を利用した。日記の内容は、大部分は日常の行動記録の羅列である。天候のこと、起床や就寝のこと、病気のこと、誰が尋ねてきて何をしたか、誰と基をうったか、手紙を誰から受け取り、誰に出したのか、どんな本を読んだか等であるが、なかには日常生活のなかでの後悔や自責の念、告白、詩や文章の論評、師友の言の論評、修養法等、曾国藩自身の赤裸々な思いも綴られていて、通読しながら曾国藩の生き方、人間としての生きざま、その意欲・情念・行動の傾向・原理を垣間見ることができた。

第2の史料として家書と家訓を挙げることができる。家書は家族に宛てた書簡を集めたもの、家訓は主として次男曾紀沢に与えた教訓の手紙を収録したものである。前者は道光二十(1840)年二月初九日から曾国藩の死の前年同治十(1871)年十一月十七日まで、後者は咸豊六(1854)年九月二十九日から死の前年までのものが収められている。小論で用いた『曾文正公家書』『家訓』は、沈雲龍主編〈近代中国史料叢刊続輯〉第1輯『曾文正公(国藩)全集』(文海出版社)所収のものであり、これは同治光緒年間伝忠書局刊行本の影印本である。なお家書についてはオリジナルを写真印刷でおさめたものが呉相湘輯『湘鄉曾氏文献』〈中国史学叢書之一〉(台湾学生書局、1965)内にあり、それと対照した。家書・家訓は、生活の基盤である家族に宛てた日常性の色濃いものだけに、その平易で、意を尽くした、のびやかな文章は、血の通った温かさが感じられるし、また淡々と自己を語り、他を論ずるかに曾国藩の生活の表裏があますところなく語られている。なお書簡には師や先輩・友人・幕僚・同僚に宛てた『書札』も全集におさめられているが、ここでは人間の本性がもっとも表れやすい家族宛の書簡に限定して、人間曾国藩を描き出したい。以下に頻出する史料の表記は『家書』『家訓』などと略記する。

(4)

まず簡単に彼の略歴についてふれておきたい。「曾門四弟子」の一人で、日本公使を勤めたことのある黎庶昌が編纂した『曾国藩年譜』(前掲『曾文正公(国藩)全集』所収)などにもとづいて紹介しよう。

曾国藩は、字を伯涵、号を滌生、諡を文正という。嘉慶十六(1811)年十月十一日、湖南省湘郷県白楊坪において曾麟書の長男として生まれ、同治十一(1872)年二月初四日に60年4か月の生涯を閉じた。曾家の祖先はもともと湖南省の衡陽に住まい、清初に湘郷県城の南55キロにある荷塘都に移り、祖父玉屏の代の嘉慶十三(1808)年に同県白楊坪に転居した。曾家は代々農耕を生業とし、学問で身をたてる家柄ではなかったが、曾家が官界とはじめて関わりをもったのは、父麟書が院試に合格し生員となってからである。

曾国藩誕生の時に曾祖父曾竟希、祖父玉屏は存命していた。彼らは自ら肥桶を担いで農事に勤しみ、儉約による慎ましい生活を積み重ねて、しだいに資産を形成し、富農とまではいかな

いまでも、田畑の一部を小作あるいは雇用労働による耕作のできる中小地主の地位をえるにいたり、郷里では篤農家としても名声をえていた。そのなかにあつて祖父玉屏は父麟書に学問をさせ、士人となることを期待した。父は家塾利見齋を開き、子弟十余名を教えながら科挙に挑み、道光十二（1832）年、17回目の挑戦にして院試に合格、湘郷の県学に入り、いわゆる生員となった。時に父43歳であった。このような環境のなかで曾国藩も幼い頃から父の家塾で科挙のための勉学に励んだ。

曾国藩は早熟な天才ぶりを発揮し、一族の希望の星であった。14歳で県試に合格、16歳で長沙の府試にパス、22歳で受験した院試では補欠となった（この時父も受験、首席で合格）が、侑生に選ばれて郷試の受験資格をえた。道光十四（1834）年24歳の年に湖南の郷試に36番で合格したが、北京での会試には失敗した。次の道光十八（1838）年の会試には38番、殿試には42番で合格して進士となったが、朝考では3番の好成績となり、さらに道光帝自らの答案閲読により2番に抜擢され、翰林院庶吉士に任ぜられた。時に曾国藩28歳の若さであった。当時の進士合格者の平均年齢が35歳、4、50歳で合格する人がざらであったことを考えると、曾国藩の秀才ぶりがうかがえよう。

いったん帰郷した曾国藩は、道光二十（1840）年正月（30歳）再び北京にのぼる。同年庶吉士となって3年目に行われる試験、散館考試では19番の成績となり、翰林院檢討の職に就いた。ここに以後十有余年におよぶ北京での官僚生活が始まった。翰林院に入ってから曾国藩は、湖南の宋学の大家唐鑑、道光・咸豊両帝の師傅倭仁らとの交流を通して朱子学を学ぶことに没頭、そのなかで克己省身の精神を培った。この間国史館協修、翰林院侍読、四川郷試の正考官（主任試験官）、翰林院教習、会試の同考官（副試験官）、翰林院侍講学士等を次々と歴任、道光二十七（1847）年37歳の時に内閣学士兼礼部侍郎待遇に昇進、武会試正總裁をもつとめ、39歳で礼部右侍郎に昇進、兵部右侍郎代理を兼任した。道光二十九（1849）年末に曾国藩の生き方に大きな影響を与えた祖父玉屏が亡くなったが、帰郷せず、在京のまま喪に服した。翌道光三十（1850）年正月に道光帝が薨り、咸豊帝が即位し、この年工部左侍郎・兵部左侍郎・刑部左侍郎の各代理をも兼ねた。

咸豊二（1852）年42歳のとき吏部左侍郎代理を兼任し、まだ帰郷を果たせないうでいた曾国藩は、丁度幸運にも江西郷試の正考官に任ぜられ任地に赴いた。その途中太湖（安徽）で七月、母江氏逝去（六月十二日）の訃報に接して、急遽郷里の湘郷に帰ることができた。時に太平軍は、十月長沙の囲みを解いて北上し、十二月武昌を陥れ、さらに長江に沿い水陸両路で東下して南京（翌年二月太平天国の都となる）へと進んでいく。太平軍によってもたらされた江南農村の大混乱を收拾するために、十一月末、曾国藩に対し湖南団練を組織するよう勅命が下された。しかし曾は当初服喪を理由にこれを固辞しようとしたが、周囲の強いすすめもあつて受け入れ、長沙でその編成に着手、これがのちに発展していわゆる曾国藩の湘軍となった。咸豊三（1853）年四月、太平軍に包囲された南昌の奪回にむけて初めて省外に出陣したのを皮切りに、

弟国華、弟国荃、江忠源、羅沢南、胡林翼、左宗棠、李鴻章、同兄李瀚章らを督率して各地に転戦した。以後太平軍と、一進一退の激しい死闘を繰り返した。その間英仏連合軍とのアロー戦争が起き窮地にたたされた清朝は曾国藩を两江総督兼欽差大臣に任用し(咸豊十<1860>年六月)、江南における政治・軍事の大権を与えて太平天国の攻略にあたらせた。同治三(1864)年六月太平天国の都(南京)が弟国荃の手によって陥落、15年に及んだ大乱は終息した。時に曾国藩は54歳、その功績により太子太保を加えられ、世襲の一等侯爵に封ぜられた。文官に対する侯爵の授与は清朝空前の榮譽であった。

しかし江北では太平軍の残党と合流した捻軍がゲリラ戦を激しく展開していた。曾国藩は同治三(1864)年十月その討伐を命じられ再出陣し、李鴻章・左宗棠らの働きで、同治七(1868)年秋には捻軍を平定することができた。曾国藩は两江総督から国政を左右する直隸総督に転任し、同治九(1870)年五月には外交交渉の絡む天津教案の処理を命じられた。事件の決着を待って辞職し休養を願い出たが許されず、再び两江総督の任に転じ、在任1年有余、同治十一(1872)年二月総督衙門内の庭を散策中に卒した。享年62歳であった。

(5)

我々は人間として生を受けて以来、時間系列にそってさまざまな変化を経験しているし、生あるかぎり変化し続ける。また我々はけっして一人で生活しているわけではなく、社会的に相互関係をもたなければ生存さえむつかしい。そして社会は個人が誕生するまえから存在している。社会がある以上、人間が社会に受け入れられる人間となっていく過程つまり社会化は避けられない。社会化の課題は二つあって、一つは社会がどのようにして諸個人をその社会の成員につくりあげていくのか、もう一つは個人がどのようにして社会を支える成員になっていくかである。これはまた相互に深くかかわりあっているのである。諸個人のパーソナリティもこの関係のなかで表出される。

曾国藩のパーソナリティを考える場合、まず彼のパーソナリティの形成に与って力があつたと思われる曾国藩の地域環境、家庭環境である。まずここで育まれた人生観・生活観から話を始めていきたい。

曾国藩の故郷湘郷、その県城は湘江の支流瀟水(湘潭で湘江に合流)中流域西岸にあり、県城の人口は3万人程度の町で、交通灌漑の便よく、地味豊かなことから古くから開けていた。県全体の人口は50余万人である。湖南省は、地理的には「六水三山一耕地」とか、また産業的には「湖広熟すれば天下足る」という諺があるように、水運に恵まれた穀倉地帯である。ここ湘郷も同様で、主要な産業は稲作であり、副業として林業・漁業・鉱山・狩猟・手工業等が多種多様に営まれている。しかし耕地が少なく、耕地に比して人口が多いこともあって、生活はけっして豊かではなく、この地の民は誰もが稼穡の艱難を知り尽くしていた。そのためこの地域には勤勉・儉約の遺風があり、耕耘に勤しんで春夏秋冬休むことを知らない土地柄である。

1870年前後に中国を踏査したドイツの地理学者リヒトホーフンは、湖南人の激しい排外主義を体験しながら、そのなかで湖南人の一般的な性格について、忠実で正直、強烈な自意識、粗野と反抗心が特徴であると分析したが、比較的教養のある湖南人との交流を通して感得した特質として、彼らが賢明で誠実かつ率直、口先だけでなく行為の上で懇切であったこと、中国人中もっとも保守的で古来の習慣と信念を維持していること、家族内における家長専制・祖先崇拜・孝養・貞順を尊重していることなどを報告している⁹⁹。湖南のこのような遺風はここ湘郷でも同様であり、それが農民であれば淳厚勤樸となり、兵となれば猛勇果敢となり、郷紳であれば儒雅の風を生み出している。

曾国藩の生家白楊坪は、湘郷県城から南西60キロの地、高嶺山という山の裾野にある山あいの寒村である。祖父玉屏の代にこの地に移り住み、祖先伝来の農業を営んでいた。どれほどの田地があったのかは定かではないが、祖父の代に百余畝を有した¹⁰⁰というから、曾家はけっして大地主ではなかった。代々家族をあげて額に汗して農耕に勤しむ自作農家である。曾国藩の誕生した時に存命していた曾祖父竟希は毎日未明に起きて終日かつ年中農事に励んでいた。祖父玉屏も30代半ばに改心し遊俠の身から転じて農業に精励、裏山の急斜面をのぼった山腹に岩を穿って棚田を切り開き、雇農とともに日夜灌漑と耕耘に努めて収穫の拡大を図った。家では豚や魚を飼い、菜園を作っていた¹⁰¹。その精農ぶりは、曾国藩が翰林院に入ってから自ら野菜を植えたり施肥をしたりした（『家訓』同治二年十二月十四日〈致紀瑞〉）ことからうかがえる。いささかなりとも財をなしたというならばこの祖父の代であったといえる。曾国藩の幼年時代は曾祖父・祖父が若干の雇農や使用人もちいて農耕を営み、父は（のちに曾国藩も）祖父の期待を一身に受けて家塾を経営しながら科挙に挑戦していた。祖母は紡ぎ車をまわし、母は菜園・養豚等の世話や家事を忙しく切り盛りした。何胎焜氏が、祖父を「守正不阿」、父を「恂恂たる儒者」、祖母を「嘉惠親族」、母を「善事舅姑」と評した¹⁰²のは、曾国藩を取り巻く家族環境を言い得て妙である。

長男である曾国藩には、1人の姉と4人の弟、3人の妹がいた。幼いころの様子について『年譜』嘉慶十八年（公3歳）でみると、相貌は端正で重厚、泣き声を聞いたことのないほどおとなしい子で、けっして利発とはいえなかった。母が多忙であったために、彼の守りは祖母にまかされ、いつも祖母の紡ぎ車の傍らで寄り添うように花を眺め、鳥の声をきく生活をおくった、という。長じてからは一般の村の子供たち同様に、近くの溪で魚を釣り、山野に鳥獣を追い、また家計を助けるために農事や家事を手伝った。時には籃を提げて市街にでかけて野菜売りをした（『家書』同治六年正月四日〈致澄侯〉）こともあった。祖父が常々語った、いわゆる「国藩が翰林に列したとはいえ、我が家はなお作田によって業をなし、彼に頼って飯を食べてはならない」（『家書』同治五年六月初五日〈致澄侯〉）という訓戒に示されるように、曾家の勤農の伝統は、曾家の遺訓・家訓として継承されていくのである。また曾家伝来の篤農・勤勉は同時に儉約にもつながるものであった。曾祖父は父からもらった小遣い銭100文を5

ヵ月間で2文しか使わず残り総てを返したという儉約ぶりであり、祖父も自分で作った野菜を手ずから摘んで食卓にのせ、菜食を尊び食肉のない質素な生活を楽しんだ(『家書』同治四年閏五月十九日清江甫〈致紀沢〉)という。

曾家はこのように代々官僚を輩出する士風の家柄ではなかったが、儒教的教養を尊ぶ家であった。曾祖父は近郷の家塾に学んだ経験をもち、孝友敦篤をもって尊敬されていたし、祖父も祖廟なきを憂いて祠堂を建立し祖先を祭り、貧しくとも礼を大切にすることを説くとともに、子弟が通材宿儒と交流して学問することを奨励した。また郷党における訴訟などの困難には仲介の労をいとうことなく、また郷里の荒廃や窮乏の復興や開発にも積極的に関与するなど、地方の顔役的存在でもあった。父も43歳で秀才となった苦勞積学の人であり、祖父同様に郷里の名士としての役割を果たしていた。曾国藩もこのような環境のなかで5歳になると祖父・父のもとで読書を学び始めることとなる。

こうした曾家をめぐる地域・家庭環境のなかで曾国藩が生涯の指針とした、また同時に曾家の家訓ともなった祖父玉屏の遺教をここで挙げておきたい。なぜならばこの遺訓が同時に、総体として曾国藩のパーソナリティ形成の大きな要因となっているからである。その遺教は「八字三不信」(『家訓』咸豊十一年三月十三日〈致紀沢紀鴻〉、『家書』同治五年十二月初六日〈致澄弟〉)である。「八字」とは、孝(祖先の祭祀)・宝(近隣との和睦)・早(早起き)・掃(掃除)・書(読書習字)・蔬(蔬菜の栽培)・魚(養魚)・猪(養豚)、「三不信」とは、「不信僧巫、不信地仙、不信医藥」をさす。曾国藩はこの遺訓をかたときも忘れることなく自らも率先して実践し、また家族に対して繰り返しこのことを遵守するよう諭している。曾国藩は『日記』『家書』『家訓』のなかで忠君愛国を語ることはほとんどないが、ここに示した祖父の遺訓を通して家族・一族・郷党の和睦・維持につながる戒めを繰り返しのべているのが特徴的である。曾国藩の人生観の大きな骨格はまさにここを基盤として形成されていることがうかがえよう。

(6)

曾国藩の理想とする生活は、子々孫々郷里にあって自給自足の農耕に従事し、贅沢にならない程度の暮らしをし、健康長寿で、家族をおさめ、郷里と和睦し、儒家の学問と実践に励む姿であった。その思いは『家書』『家訓』『日記』の随所に表出している。曾国藩にとって農耕が生活の基本であった。家族・一族に対して、祖父のつくりあげた勤農の遺風を維持するよう繰り返し説いている。たとえば『家書』咸豊四年四月十四日〈致澄侯温甫子植季洪〉では、

我が家風は半耕半読。祖先以来の伝統を守り、慎んでいささかも官僚の気風に染まってはならない。輻にのってはいけない。人をつかって水や茶などを汲ませてはいけない。薪とりや収糞などのことも自分で行き、田植えや稲刈りなども常に学ぶようにすべきである。と郷里の兄弟たちへ書き送った。また『家訓』咸豊十一年四月初四日東流県〈致紀沢〉では、郷間早起きの家、蔬菜を栽培する家は多くは興り盛んになるが、朝寝、菜園のない家は多

くは衰微する。省城の菜園で高い賃金を出してでも人を雇い、郷里の家で蔬菜を植えてもらいなさい。二人雇ってもよい。金がいるなら軍営から送金する。

と指示を送り、その後便では雇用人が到着したかどうか、蔬菜のでき具合はどうかなどを問うている。曾国藩自身も軍営のなかに、また两江総督官舎の裏にそれぞれ菜園をつくって蔬菜を栽培している。蔬菜づくりだけではない。養魚、養豚、竹を植えることも一家の興隆・衰退の気象を占うものだから、怠ってはならない（『家書』咸豊八年七月十四日〈致澄季〉）と説いた。ここにあげた野菜の栽培、魚の養殖、豚の飼育、竹を植えることは、いうまでもなく自給自足の生活を意味する。さらに先の早起き、掃除、読書を加えれば、まさに牧歌的な農村でつましやかな生活を送る小地主的読書人の家庭が浮かび上がるであろう。

家族の女性に対しても曾国藩の戒めはつづく。彼はいう。

古来から世家の長久なるものをながめてみると、男子は耕・読の二事に心掛け、婦女は紡績・酒食の二事に心掛けるべきである。・・・婦女はたとえ料理に精通していなくても、必ず厨房にはいって酒や醃醢しおからや惣菜の類をつくることに留意し、男子は蔬菜づくりと養魚に心掛けねばならない。これが一家の隆盛の徴であり、けっしておろそかにしてはいけない。紡績は少量であっても中断しないようにする。（『家訓』同治五年六月二十六日宿遷〈致紀沢紀鴻〉）

ここにいう紡績とは糸を紡ぐことであり、酒食は料理（日常の食事や客人の接待）のことをさすが、この外にも婦女たちに裁縫、刺繡、洗濯、製茶、漬物や履物づくりなどに励むよう喧しく述べている。ここにも彼の理想とする、男は耕し女は織り、衣食住を自給自足する、という伝統的な農村が描かれている。

しかし曾国藩が官僚として出世街道を驀進するなかで、兄弟一族が奢侈になり、また傲驕・逸情じとなり、曾家の遺風たる自給自足の生活と、それを支えてきた勤勉と儉約が崩れはじめることになる。生活の安定のためにその基盤として一定の土地をもち居宅を有することは大切だと考えたが、自らは「做官発財や、宦囊をもって金を積み子孫に残すことを恥とし、廉俸以外の銀錢はもたない、蓄積して子女衣食のために使わない」（『家書』道光二十九年三月二十一日〈致致澄侯温甫子植季洪〉）と心に誓い、兄弟や子弟には「銀錢・田産はもつとも驕氣・惰氣を生じやすい。我が家ではけっして錢を蓄えてはならないし、田を買ってはならない。読書に努めていれば、飯が食えないという心配はない」（『家訓』咸豊十年十月十六日〈致紀沢紀鴻〉）と諭した。こうした銀錢をためるな、田を買うな、大きな家を建てるなという戒めの背景には、曾国藩の地位や名誉があがり家が極度に富むことをおそれたからである。彼は風水や算命などの迷信的なものを信じなかったが、中国人の伝統的な信仰である、超越者としての天や天命に対する畏敬の念は深かった。彼は人生「盈みつれば虧かくる」を天命・天理とした。エリートコースの途上にある曾家は今や盈つるの時である。何の不足もなく盈ち足りることによって凶になることをおそれた。盈満は没落・衰退・破滅の凶機をそのうちに孕んでいるからであ

る。そして凶機を避けるために、また満ち足りた境遇の盈満をおそれて、^か闕けることを求めた。闕けることを求めて、これを悔い改める努力を重ねることが、凶を避けて吉となる道だと考えたのである。それを曾国藩の生活に則していうならば、寒士の風味を忘れるな、傲惰を戒めよ、^〇勤儉自持、習勞習苦をもって楽しき・慎ましきに処れ、官宦の氣習に染まるな、^〇ということであろう。また自戒をこめて、こうもいう。「名位はなはだ高きが故に祖宗累積の福を自分一人で享尽することをおそれる」と。そのために惜福の心を説いた。つまり祖宗の蓄積のうえに勤儉によってさらに福を積み重ねて子孫に残せば、家門は幾久しく継続すると考えたのである。

このように彼にとっての一番の関心事は家を治めることであり、その行き着く先は勤・儉であったが、それ以上に家を取り巻く人間関係にも注視した。親子兄弟の和を重んじ、孝友の家は瑞祥、長久と考え、家族による祖先の祭祀をもっとも重要な行事とした。^〇また親族・隣里にたいしても恭敬をもって歓待すること、急難あればこれを救済し、訴訟あればこれを解決し、慶事あればこれを慶祝し、病あればこれを問ひ、喪あれば弔うことを、家族に説いている。こうした家族・親族・隣人に対する親愛の情は、さらにそれらの人間を育ててきた郷里全体にも及んだ。その意味で彼の創設にかかる湘軍は愛する郷里の防衛軍でもあった。

最後に容闕が两江総督曾国藩(53歳)と安慶で会見したときの模様を伝える自伝『東学西漸記』の一節を紹介して、曾国藩の実像を彷彿させていこう。

曾国藩は・・・人生の最頂期にあった。身長は5尺8、9寸。がっしりとした体格とたくましい筋肉に均整のとれた身体。広い胸幅。怒り肩の間に大きくて、調和のとれた頭。広くて長い額。目は三角形のまぶたの下に一直線に並んでいて、東洋人の顔の特徴である目じりのつりあがりがなく、一般にこれに付随している高いほおぼね——これも中国人の人の相に特有の顔形の一つだが、それもなかった。顔は幅が狭く、毛深い方だった。ほおひげを伸びるにまかせていたので、長いあごひげとともに広い胸一面に垂れさがり、威風堂々たるものがあつた。目は大きいとは言えなかったが、眼光人を射る鋭さがあり、澄んだ薄茶色をしていた。大きな口は薄いくちびるで堅く結ばれ、強固な意思と高遠な理想を表現していた。^〇

(7)

曾国藩のパーソナリティ研究はまだその入り口に到達したにすぎない。彼の全体像はあらためて検討するとして、ここでは『日記』『家書』『家訓』を通じて大まかに掴みえる、曾国藩のパーソナリティの特徴的な側面を指摘してまとめにかきたい。

体質的には母のそれを受け継ぎ虚弱であり、耳鳴・疥癬・呼吸器疾患・視力の減退・目眩・手足の痺れ・不眠症などさまざまな病に悩まされた。それは彼の行動をして極めて自制的内省的ならしめ、日常的に節制にあいつとめようとした。『日記』や『家書』などには随所に健康や養生についての戒めや処方箋が自分や家族に対して事細かく示されている。精神的には繊細

で、極度に人の気持ちや噂を気にし、人前を気がねすることもあったが、意思が強くてねばり強く、「三不信」を信条としたことにもあるように合理的理性的で情におぼれることは比較的少なかった。超越者としての天に対する畏敬の念が強く、満ち足りることによって凶になるのを恐れ、清・慎・勤によって自らを謙抑にすることに心掛けた。家族的倫理としての孝を尊び、現在の自分があることは先祖の積徳善行の賜物、先祖代々の恩沢によるものであるとし、子孫に対しても積徳善行をたえずもとめ、家の維持こそが人生の基本であると考え、自給自足的な農村的気風を失わず、勤・儉によって慎ましく生活する寒士としての家風を尊重し維持しようとした。弟たちとの強い兄弟愛で結ばれ、彼らに対して気配りと限りない愛情をもって接したし、官僚として最善の義務を果たすことにつとめ、実に清廉潔白の士であった。自己の欠点を発見しそれを悔い改めることを生活の基本にしようとした。碁が大好きで、座談に巧みで、よくしゃべり、冗談もよくいったという。ただ湖南訛りとか湘郷訛りはぬけきれなかったようだ。

ここで一つの体系だった人間曾国藩像を提示することが求められるのであるが、パーソナリティ研究序説として、その一こまを描くにとどめる。あえてここで曾国藩像を総括するとすれば、曾国藩は、清朝の維持とか伝統的な漢民族の儒教的倫理体制の維持とかに情熱を燃やして太平天国に立ち向かったわけではなかった。彼は儒教的倫理価値を身をもって実践していた家庭のなかで人間的に形成され、彼自身もこの家風を価値あるものとしてそれを維持することにつとめていたにすぎない。したがって曾国藩が太平天国や捻軍などとの反革命戦を戦ったのは、自身の信条に忠実に、官僚としての義務を果たしたに過ぎないといえよう。

すべての人間は伝統的な環境のなかで人間的に形成される。したがってなかなか伝統的な人間的あり方から抜け出ることができない。この伝統的あり方から抜け出ることができるのは、秀れた個人だけであり、そうした個人が伝統的社会を前進させるリーダーになりえるのである。しかし曾国藩がそうでありえたかどうかはしばらく留保したいが、ただ愛国者か売国奴かというような二者択一の評価にはなじまないことだけは明白であろう。

〔注〕

- (1) 清水稔・坂野良吉編『近代中国の人物群像——パーソナリティ研究』〈汲古選書25〉（汲古書院、1999）。
- (2) 曾国藩を主題として取り上げた研究を一覧すれば次の通りである。
小島祐馬「曾国藩」『中華六十名言行録』（弘文堂書房、1948）、大谷孝太郎『儒将曾国藩——中国指導者の精神構造』（東京布井出版、1977、大谷氏が1951年以来『彦根論叢』〈人文科学特輯〉等に寄せられた一連の曾国藩論をまとめたもの）、佐藤震二「曾国藩の学問」（『東京支那学報』12、1953）「曾国藩の倫理的な性格」（『アカデミア』6、1954、佐藤一郎「曾国藩について」（『藝文研究』6、1956）「曾国藩と俗文学」（同前7、1957）、稲葉誠一「曾国藩（上）」（『東方学紀要別冊』1、1962）「曾国藩の東征軍1-9」（『専修国文』1-2、5-6、9-10、13、17、21、23、25、1967-79）、安岡正篤『偉人曾国藩の内面生活』（『東洋思想と人物』明德出版社、1959）、近藤秀樹『曾国藩』（『中国人物叢書』12、人物往来社、1966）、三石善吉「中国知識人

論——知識人の忠誠と脱走——曾国藩と洪秀全との対抗」(『思想の研究』5、1971)「体制知識人と古典——曾国藩の場合」(『漢文教室』112、1975)、波多野善大「曾国藩のパーソナリティーについて」(『愛知学院大学文学部紀要』6、1976)「天京攻略をめぐる人間関係——曾国藩を中心として」(『東方学』54、1977)「曾国藩と沈葆楨の絶交について」(『愛知学院大学文学部紀要』7、1978、以上3編は『近代中国の人物群像——パーソナリティー研究』汲古書院、1999所収)、本田濟「曾国藩の哲学——日記を中心に」(『日本中国学会報』30、1978)、高橋良政「曾国藩の思想についての一考察——治兵論をめぐる」(『フィロソフィア』69、1981)「曾藩と読書」(『駒沢大学外国語部論集』23、1986)「曾国藩の思想の一考察——土着思想との関連」(『実践國文學』33、1988)。なお洋務運動・洋務派官僚および太平天国・郷勇とのかかわりで論じられたものは多いが、ここでは割愛し、小論との関係でもっぱら人物論に言及しているものに限定した。

- (3) 岸田秀訳、紀伊国屋書店、1969年刊行。
- (4) Mao Tse-tung; The Man in the Leader, New York, 1976.
- (5) 作成にあたっては、フロイトやユングらの心理学にかかわる著作やパーソナリティーに関する研究書の、初歩的なものから専門書にいたるものを読みながら、とくに精神分析の手法を歴史学の分野でどのように応用したらいいのか苦悩した。まだ確たる道筋を探りあててはいないが、精神分析の手法を学ぶことによって歴史上の人物を人間的に見つめる視点ももてたように思っている。紙面の関係で上記の研究業績をいちいち挙げることはできないが、そこから得られた貴重な教示に感謝の意を表したい。
- (6) 『漢奸膽子手曾国藩之一生』は、曾国藩を「聖人」と称揚する蒋介石の評価に対抗して、1944年に延安で執筆され、翌年新華書店晋察冀分店から出版された。のちに『中国近代史』上冊(人民出版社、1947)・『范文瀾歴史論文選集』(中国社会科学出版社、1979)に収録された。
- (7) これについて並木頼寿氏が「中国の近代史と歴史認識——洋務運動・曾国藩の評価をめぐる」(『岩波講座現代中国』第4巻〈歴史と近代化〉岩波書店、1989)のなかで示唆に富む論評をしている。本論における以下の評価の変遷はそれに負うところが大きい。なお中国における曾国藩の近年の研究は、かつての「漢奸膽子手」曾国藩の呪縛から解き放たれつつある。たとえば朱東安『曾国藩伝』(四川人民出版社、1985)『曾国藩幕府研究』(成都出版社、1995)、史林『曾国藩和他的幕僚們』(中国言実出版社、1997)、成曉軍『曾国藩与中国近代文化』(湖南人民出版社、1991)『曾国藩的幕僚們』(東方出版中心、2000)などの研究がそうである。一方、台湾ではかつて蒋介石・国民党が曾国藩を称揚したこともあって、「儒将」曾国藩と称され、政治的にも軍事的にも、また学者としても評価は高い。蔣星徳『曾国藩之平生及事業』(上海商務印書館、1935)、何貽焜『曾国藩評伝』(正中書局、1938)、蕭一山『曾国藩伝』〈現代国民基本知識叢書〉(中華文化出版事業委員会、1953)などの研究がその代表である。
- (8) 曾国藩の死後、同治帝は3回にわたって曾の功績を称揚した。近代中国史料叢刊統編〈文海出版社〉第1輯『曾文正公(国藩)全集』首巻、上諭、11-16頁。なお朱東安『曾国藩伝』(前掲)「前言」参照。
- (9) 拙稿「譚嗣同の政治思想に関する一考察——民にして学あらば国亡ぶと雖も亦た可なり」(『内田吟風博士頌寿記念東洋史論集』同朋舎、1978)279頁参照。
- (10) 『黄帝魂』のなかの「漢奸辨」による。羅家倫主編〈中華民國史料叢編〉中国国民党中央委員会党史史料編纂委員会印行本、50頁による。『黄帝魂』の著者・編者は誰なのか確定できないが、当時の新聞・雑誌等に掲載された革命的な言論を選択・編集し、編者の按語をつけて一冊にまとめたものである。なお『黄帝魂』についての詳細は、近藤邦康『辛亥革命』(紀伊国屋新書、1972)のII『黄帝魂』を参照のこと。
- (11) 拙稿「楊毓麟の政治思想について」(『鷹陵史学』8、1982)参照。並木頼寿氏が前掲論文のなかでも指摘しているように、湖南の革命家宋教仁・蔡鏗も、曾の全面否定ではなく、曾の救国や用人・用兵等の側面に対して一定の評価を与えている。

- (12) 蒋介石『中国之命運』（日本華光社、1946）、波多野乾一訳『中国の命運』（日本評論社、1946）参照。なお注(7)の何貽焜・蕭一山各氏の研究もこの範疇に属するものである。
- (13) ここでは〈湘軍史料叢刊〉黎庶昌撰『曾國藩年譜 付事略／榮哀錄』（岳麓書社、1986）も参照する。小論では年齢はすべて数え歳とした。なお曾國藩の略歴に関しては、注(2)にあげた大谷氏や稲葉氏、注(8)の朱東安・蕭一山・何貽焜各氏の各研究もおおいに利用させていただいた。記して感謝の意を表する。
- (14) 『湘郷県志』（同治13年）巻1－2地理志、神田正雄『湖南省綜覧』（海外社、1936）、白岩龍平校閲・安井正太郎編著『湖南』（博文館、1905）参照。
- (15) Ferdinand von Richthofen; China Vol. 2 - 3, 1877, Do; Tagebücher aus China Vol. 1, 1907.
- (16) 趙烈文『能静居日記』同治六年九月初十日（台湾学生書局影印、1964）。曾國藩によれば「薄田頃余」、収穫が期待できない田地が千畝あったという。注(17)参照。
- (17) 仿古字版『曾文正公全集』（世界書局、1965再版）1〈文集〉「祖四世元吉公墓命銘」「大界墓表」「台洲墓表」「誥封光祿大夫曾府君墓志」等。
- (18) 何貽焜、前掲書、22－24頁参照。
- (19) 注(17)に同じ。
- (20) 『家書』同治五年十二月初六日〈致澄弟〉では、「八字」は好いが、地（風水）・命（算命）・医理・僧巫・祈禱・留客久住（客の長居）を「六惱」として嫌ったとある。
- (21) 傲驕は驕りたかぶって他人の田舎っぽさ、俗っぽさ、下品さ、汚さを笑い諷ること、逸情は安逸を貪り怠けることで、勤・儉に反する行為である。『家訓』咸豊六年十一月初五日〈致紀沢〉、咸豊十一年正月初四日〈致澄侯四弟〉、同治六年正月初四日〈致澄弟〉など参照。
- (22) このことは、『家書』『家訓』のなかで「謀事在天、成事在人」「畏天知命」「俯畏人言、仰畏天命」「余則聽天由命」「小心謹慎、冀盡人事以聽天命」「皆有定命、半由人事、半由天事」というように随所に表明されている。
- (23) 『家書』同治元年五月十五日〈致沅季弟〉。
- (24) 『家書』道光二十四年三月初十日〈致六弟九弟〉。
- (25) 『家書』同治六年正月初二日〈致沅弟〉。
- (26) 『家訓』咸豊六年九月二十九日〈致紀鴻〉。
- (27) 『家書』道光二十七年六月十七日〈致叔父母〉、同治元年五月十五日〈致沅季〉など。
- (28) 『家書』道光二十九年四月十六日〈致澄侯温甫子植季洪〉、『家訓』同治九年六月初四日將赴天津示二子〈致紀沢紀鴻〉、咸豊十年閏三月初四日〈致紀沢〉。
- (29) 『家訓』咸豊十年閏三月初四日〈致紀沢〉。
- (30) 第13章曾國藩と面談して、129頁、百瀬弘訳注〈東洋文庫136〉平凡社、1969年刊。なお原文は、My Life in China and America, New York, Henry&Co.,1909であり、漢訳に、徐鳳石・憚鉄樵、商務印書館、1915年版がある。

〔付記〕本論文は平成13年度佛教大学特別研究助成による研究成果である。

（しみず みのる 史学科）

2002年10月16日受理